令和元年度　第２回　豊岡市総合教育会議（定例会）議事録

○　開会及び閉会の日時及び場所

2019 年 11 月 6 日（水）

場　所　　豊岡市役所　3 階　庁議室

所在地　　豊岡市中央町 2－4

開会時間　　午前 10 時 00 分

閉会時間　　午前 11 時 30 分

○　出席者及び欠席者の氏名

出席者　　豊岡市長　　中貝　宗治

豊岡市副市長　　森田　敏幸

豊岡市教育委員会

教育長　　嶋　公治

委員　　佐伯　和亜

委員　　向井　美紀

委員　　飯田　正巳

委員　　成田　壽郎

○　事務局等関係者の氏名

事務局　　教育次長　　堂垣　真弓

教育総務課長　　永井　義久

こども教育課長　　飯塚　智士

こども教育課こども教育課主幹兼教育研修センター所長　　森山　健二

教育総務課主幹兼企画係長　　野﨑　律男

教育総務課課長補佐　　木之瀬　晋弥

教育総務課教育総務係長　　竹内　有子

教育総務課教育総務係主査　　藤田　祐

政策調整部長　　塚本　繁樹

政策調整課長　　井上　靖彦

生涯学習課長　　大岸　和義

生涯学習課図書館主査　　奥　久美

○　日程

１　開　会

２　あいさつ

３　協議事項

⑴　第４次とよおか教育プランの策定について

⑵　市立小中学校の適正規模・適正配置への取組について

4　その他

5　閉　会

○　会議の概要

―――――――――――――――――――― 開会　午前 10 時 00 分 ――――――――――――――――――――

[日程１　開会]

（堂垣教育次長）

ただ今から、令和元年度第2回の豊岡市総合教育会議を開会します。会議で活発なご意見が出ますように、市長に代わりまして、私のほうが司会進行をさせていただきます。なお、本日の会議の終了時刻は午前 11 時 30 分を予定しておりますので、よろしくお願いします。それでは、開会にあたりまして、会議の主宰者であります中貝市長よりごあいさつを申しあげます。

[日程２　あいさつ]

（中貝市長）

おはようございます。世間では大学入試での英語民間試験の導入見送りが話題になっています。平田オリザさんからも苦言のメールが届いていました。それほど現場から見ると、ひどいことなのだろうというふうに思います。

教育委員会とは別の案件ですけれども、マイナンバーカードを今後３年間ぐらいかけて、取得率を 60%以上にするということを突然言ってきました。導入を決めたので仕方がないのですけれども、これって、赤ちゃんを含めての話なのです。本人でないといけない。どうしたらそんなに国民が動くのだと。だけど、国で決めている、霞ヶ関なり官邸で決めるので、こんなことが出てくるのです。担当は大変で、例えば土日も開けますとか、窓口を週に１回夜７時までやりますとか言っています。やむを得ないのかもしれないけれども、全然動く方向が逆ではないかと。むしろ、土日はきっちりと休まないといけないし、むしろ今は窓口を 17 時で閉めるかみたいな話をしているときに何ていうことを言うんだといって、わんわんやっているところです。

何を言いたいかというと、あれを他山の石としないということです。僕たちもいろんな政策を決めているのですけれども、本当にそれは現場にちゃんと通っているのかどうか、そこを思い浮かべながら政策を決めていかないと、ただの傲慢だということになりかねない、そういう気が非常に強くしています。

今、教育委員会は、幼保の再編のことであるとか、それから、小学校・中学校の適正配置も動き出したわけです。別に傲慢というのではまったくなくて、いろいろ意見を言われながらひたすら耐えているという、大変健気な状況になっているのですけれども、これが僕たちの基本的な姿勢なのだろうと思います。いろんな記録を見ると、地域によってはきついことを言われていますけれども、スタートだというふうに思わないといけない。対話が始まったというふうに思う必要があります。対話というのは、向こう側の気持ちを受け止めて理解するということもありますし、逆にカーッとなっている人たちもやりとりをしているうちに、こちら側の事情というものをだん

だん分かってくる。その間合いを縮めていくという作業ですので、その過程の中で共同責任みたいなものが生まれてきます。コ・クリエーションという言葉がありますが、意見が違う者が、立場の違う者が集まって、みんなで必要な１つの結論を導き出していくのだという、そのぐらいの気持ちで今後取り組んでいくほうがいいのではないかなというふうに思います。よろしくお願いしたいと思います。

（堂垣教育次長）
次に教育委員会を代表しまして、嶋教育長よりごあいさつをお願いします。

（嶋教育長）
おはようございます。小中学校の校長に言い続けていること、学校教育の３つの哲学です。１つは、「もしうまくいっているなら変えようとするな」です。２つ目は、「もし一度やってうまくいったなら、またそれをしなさい」、３つ目は、「もしうまくいっていないと感じるのであれば、何でもいいので違うことをしましょう」この３つの哲学をずっと言い続けて、そのとおり今、学校も一所懸命頑張ってくれている状況です。うまくいっているかどうかということをどこで判断するかという問題がありますが、それはとりもなおさず、子どもの事実です。子どもにとってどうなのかということ。子どもにとって、力がついているのか、いいことなのか、幸せなことなのかということを判断基準としながら、うまくいっているかどうかを判断していく。
その評価というのは、定性的な評価と、定量的な評価がありますので、どちらもバランスよく取っていきたいということで、教育委員さんも一緒になって、この 10 月から 11 校の学校訪問をして、定性的な評価をしようということで見てきました。こんなふうに見ていくと、学校の評価も雰囲気も分かりますし、子どもの表情、先生の表情も分かりますから、これを丹念に続けると、東須磨小学校のようなことは起きないだろうと信じて今やっているわけです。その中で、中学校が非常に落ち着いている。これは前回も申しあげましたけれども、そんな感じがします。例えば古文の音読をグループの中で向かい合って男女で一緒にできる。あるいは、リコーダー演奏の練習を男女のグループでできる。それから、授業の中で課題を与えられて、それを対話をしながら自分たちの思考を深めていったり広げていったりする。これが当たり前にできています。
もう１つは、竹野中学校に学校訪問したときに、中学校３年生の体育を見ました。男子と女子が一緒にやっています。準備運動を見たのですけれども、自分たちの学校で作ったオリジナルの準備運動をやっていました。ストレッチのようなものからだんだん心拍数を上げていって、かなりきつい準備運動に入っていきました。１人の男子の生徒がずっと遅れていました。そして、しなやかな動きではなくて、きっと体育が苦手だろうなと思う子なのですが、ずっと遅れているけれども、ずっと最後までやり通していました。そこに聞こえてくるのが、周りの女の子たちや男の子たちの「頑張れ、頑張れ」というささやきがありました。先生もささやいていました。次の場面になったら、今度は２人１組で馬跳びをします。女子のペアがやっぱり遅れていたのですが、最後まで「ハアハア、ハアハア」言いながらやっていました。それを周りの終わった子たちはしっかりとその子たちの頑張りを見つめている。ここで気づいたのは、これはいわゆるこれからやろうとしている頑張り抜く力ですけれども、頑張り抜く力というのは、自分が気合いと根性で歯を食いしばって孤独に頑張るものではない。孤独にやって力をつけるものではなくて、周りの支

えがあって、集団の中で培うものだなということが、その体育の一場面を見て分かることがありました。

それを見ながら思い出したのが、東京理科大学の脳科学の篠原先生という方に運動遊びの観察をしていただいたときに、その様子を見てこんなことをおっしゃいました。運動遊びをやっていて、うまくいかない子がいて、一所懸命頑張っている様子を周りの子が「頑張れ、頑張れ」と応援しているときに、周りの子の脳が活性化すると。つまり、やり抜く力をつけようとして頑張っている生徒を「頑張れ、頑張れ」と言っている周りの子どもたちも力がつく。どちらにとってもいいことだと、そんなことが定性的な評価の観点で見ていくと、分かってきたということを１つご紹介しておきます。

２つ目は、定量的なものですけれども、中学校で内科系疾患で保健室に来室している人はすごく少なくなったということです。南中学校は結構大変な時期がありました。平成 25 年から生徒数は 550 人前後で変わっていないですけれども、平成 25 年当時、保健室に来室した子は年間で 1,820 人いました。去年は 635 人、３分の１に減っています。内科系で来た子だけで見ると、平成 25 年は 1,200 人いました。それが昨年は 350 人、４分の１です。つまり、お腹が痛いということは精神との関係性が考えられますので、ストレスを感じたり、学校の中で居場所がないというふうに感じている子はかなり少なくなっているということがこの実態で分かるわけです。何が変わったのかということは、ここ３年間、極端に授業の様子が変わりました。対話的に学んでいる。中堅から若い先生たちは、柔軟に対話的に学ばせ、タブレットを用いて自分たちで課題解決しようというような、そんな授業をどんどん取り入れていますので、このことだろうなというふうに思います。

そんな中で出石中学校の例を１つ言いますと、「あなたの先生はあなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という数値が全国より有意差で高いというのが豊岡の自慢なのですが、昨年、出石中学校は有意な差で低かった。校長は考えるわけですけれども、先生たちは子どもたちのことを褒めているし、いい関係だと思うけれども、なぜこんな数字なのだろうと。よく考えたら、ちゃんと伝わっていなかったということに気づくわけです。それで、去年から今年にかけてのテーマは、丁寧な教育をしよう。つまり、言葉を丁寧に使って、正しく伝わるように、それも粘り強くやっていこうということをずっとやり続けた結果、ちょっとハッピーなのですけれども数値がグンと上がって、先生も子どもたちも喜んだというような定量的な評価も出てきています。

総合しますと、今日もこれから教育プランのお話をしていただくのですけれども、うまくいっていることは変えない。これは先ほど言ったように、授業が対話的であったり、子どもに寄り添いながら授業をするということは変えない。一方で、不登校はやはりありますし、学力の問題ももちろんまだありますので、そういうものを解決するために、やはり非認知能力、このことに注目をしながら、もちろん、ワークショップもするのですけれども、それぞれの授業やそれぞれの領域や活動の中でどうしていくのかということを基幹にしながら課題解決を図ってこれからやっていきたいと、そのように考えていますので、そんなことも今日は考慮しながらご意見をいただけたらと思います。よろしくお願いします。

[日程３　協議事項]

（堂垣教育次長）

それでは、３の協議事項に入らせていただきます。内容につきましては、補足説明をするために担当部局の職員が出席しておりますので、ご了承ください。議題の１つ目、第４次とよおか教育プランの策定について、こども教育課から説明をさせていただきます。資料は№.１になります。

（森山こども教育課主幹兼教育研修センター所長）

資料１ページをご覧ください。本市では、2006 年度より豊岡市教育行動計画を策定しまして、取組を進めてまいりました。特に 2015 年度から取り組んでまいりました第３次計画では、小中連携教育から小中一貫教育に移行し、豊岡の３つの教育課題であります、(1)不登校の増加の問題、(2)学力の二極化の問題、そして、(3)特別な支援が必要な子どもたちの教育的ニーズへの対応、このことの改善に取り組んでまいりました。図１・図２をご覧ください。第１次から第３次計画におきます成果といたしまして、常に子どもの事実に学び、子どもに寄り添う教育を基本姿勢として、教育課題に向き合ってきました結果、小中学校では、自分にはよいところがあると思う児童生徒の割合、また、先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う児童生徒の割合は、共に上昇しております。教員が日常的に子どものよいところを認めるということは、子どもたちの自尊感情を高め、自分にはよいところがあると思う子どもを増やしていると捉えておりまして、第４次計画におきましても引き続き子どもに寄り添う教育に取り組んでいきたいと考えております。

次に、資料の５ページをご覧ください。本市の教育の中心課題についてです。１つ目、学力についてですが、第３次計画では、すべての教員が授業改善に取り組んできました結果、図３・図４にありますように、主体的に取り組んだり、また、話し合い活動を通して、考えを深め、広げたりする児童生徒の割合が大きく伸びました。この要因としましては、子どもの活動を重視した授業スタイルに転換したこと、また、小中一貫教育をはじめとします小学校から継続した取組、これらが充実してきたことなどが考えられます。

６ページの図５にありますように、全国学力・学習状況調査におきまして、平均正答率が 40%以下の児童生徒の割合、これが徐々に低下しておりまして、今年度ほぼ全国平均と同程度となっております。このことから二極化現象は改善してきていると捉えております。しかし、身についた知識や技能を活用する力には依然課題があり、主体的・対話的で深い学びの視点を重視しながら、すべての子どもたちの学力の向上を図る必要があると考えております。

そして、６ページの中段ですが、今後は３つのことに取り組んでいきます。１つ目は、これまでの取組の内容を改めて吟味しながら授業改善を行い、子どもたちの資質・能力を高めていくこと、２つ目は、就学前から肯定的な言葉かけ、共感的な子ども理解による学級づくりを行って、子どもたちの非認知能力を高めること、そして、３つ目に、家庭と緊密に連携して、基本的な生活習慣や学習習慣を身につけることです。

次に、７ページをご覧ください。不登校児童生徒の増加についてですが、図７にありますのが、小学校６年生から中学校１年生にかけて新たに不登校になる子どもの割合です。2011 年度では中学校で不登校になった子の 88.9%の子たちが、中学校になって新たに不登校になった子でした。2018 年度は、それが 58.8%に低くなっております。しかし、図８にありますように、不登校の人数は依然として増えておりまして、その原因、８ページの図９にありますが、その要因も複雑化、

多様化しているのが現状です。

これらのことから、次の３つのことに取り組んでいきます。１つ目は、個に応じた細かな指導・支援を行うため、教職員の指導力や専門性を一層高めていくこと、２つ目は、授業づくりや集団づくりを中心とした魅力ある学校づくりを引き続き推進していくこと。そして、３つ目に、子どもたちの心に寄り添いながら、家庭や関係機関との緊密な連携に基づいた取組を一層充実することです。

図９の不登校の要因調査にありますように、要因として最も多い割合を示しているのが、家庭に係る状況で 48%になります。ですので、保護者に寄り添いながら連携を密にしていくことが必要であり、子どもたちの将来の社会的自立に向けまして、子どもや保護者を支える体制を整えることが大切であると考えております。

次に、９ページをご覧ください。３つ目の特別な支援が必要な子どもたちの教育的ニーズへの対応についてです。資料としては、10 ページの図 12 です。ここにありますように、特別な支援が必要な子どもたちの人数は、年々増加している傾向にあります。１人１人の教育的ニーズに対応できるよう教員の専門性を高めたり、こども支援センターの心理士などが学校園を訪問し、早い段階から教員や保護者への指導・支援を行ったりしてきました。これらの取組によりまして、特別支援教育の視点を日常の学級づくりや授業づくりで実践していく姿が見えたり、本人や保護者と合意形成を図りながら合理的配慮の提供が行われたりしてきたことは、大きな成果だと言えます。

10 ページの下のほうに今後の方向性を示しておりますが、３点に取り組んでいきたいと思っております。１つ目は、引き続き支援のいらない子は１人もいないという理念の下に、さらに教員の専門性を高め、指導計画に基づいた計画的・具体的な指導・支援を一層充実させることです。２つ目は、保護者・関係機関との緊密な連携を図ること、そして、３つ目は、園から小学校へ、小学校から中学校へと早期からの切れ目ない一貫した指導・支援を強化することです。これらの取組を通しまして、子どもたちの多様な学びを支え、自立と社会参加の実現に向けて取組を進めていきたいと考えております。

次に資料 11 ページ、第２部、「豊岡の教育のめざす姿」をご覧ください。まず、基本理念です。第１部の策定の趣旨と本市教育の中心課題に基づきまして、第４次プランの基本理念を第３次に引き続き、「ふるさと豊岡を愛し、夢の実現に向け挑戦する子どもの育成」にしたいと考えております。併せて、夢や目標などの“なりたい自分の実現”に向け、挑戦するために必要な力である非認知能力、ここでは 12 ページのいちばん上のところに、特に集団の中で高めたり、やり抜く力、自制心、協働性の３つを取り上げておりますが、これらを総称して夢実現力とし、集団の中でその力を最大限に伸ばすことが基本理念の実践の充実であると考えて副題といたしました。

もう一度 11 ページにお戻りください。こう考えました理由は２つあります。それは、これまでの取組の中で見えてきました子どもたちの姿からであり、もう１つが、これからの社会をよりよく生き抜くために必要になるからです。まず１つ目の理由についてです。第３次プランにおきまして、小中一貫教育を中心に子どもの事実に学び、子どもに寄り添う教育を実践する中で、次のような子どもたちの姿を見ることができました。自分の夢や目標を思い描き、粘り強く主体的に活動に取り組み、学習を振り返って、次の学習につなげる姿、また、他者との会話を通して様々な喜びを感じながら、体験的に学ぶ姿です。こうした子どもたちの姿の背景には、最後までやり

抜く力や、他者と協働する力などの数値では表しにくい非認知能力があることにも気づくことができました。

次に２つ目の理由です。子どもたちがこれからの社会で、よりよく生き抜くためには、認知能力に加えて、この非認知能力を高めることが大切です。この非認知能力は、本来誰もが持っている力であり、肯定的な考え方や関わりの中で、繰り返し活動に取り組んだり、複数の力を関連させたりしながら育つ力だと考えております。その力は、就学前からの一貫したつながり合う授業づくりや、周りの大人の適切な働きかけなどの肯定的な教育環境によって高めることができます。さらに、学力を高めることや、よりよい人間関係を築くことによい影響を与え、本市の教育課題の改善にも寄与すると考えております。そこで、これまでの取組を礎にした改善の方向としまして、次の２点に取り組みます。

四角のところです。夢や目標に向かって、対話を通して主体的に取り組み、その実現のために挑戦する子どもを育てること。挑戦する力を育成するために必要な非認知能力を高めることにより、教育課題の改善を図ること。そして、常に子どもの事実に学び、子どもに寄り添う教育を土台としながら、非認知能力を統合的に高め、ふるさと豊岡を愛し、夢の実現に向け挑戦する子どもを育てていきたいと考えております。

次のページからは、２つの基本方針、また、それに伴う９つの基本的方向を具体的に示すことにより、教育施策の充実を図っていきたいと考えております。この資料についての説明は、以上です。

次に、第４次とよおか教育プランでは、非認知能力を高めることが本市の教育課題の改善に寄与するものと考えておりますので、ここで今年度から取り組んでおります、非認知能力向上対策事業のモデル校でのワークショップの様子を記録したビデオがございますので、ご覧いただきます。資母小学校の１年生の授業です。

【資母小学校ワークショップビデオ上映】

この資母小学校の１年生のクラスは 11 名です。どちらかと言いますと、落ち着いて授業にも取り組み、講師の指示もよく聞きながら活動していて、集団としてのまとまりが感じられました。ただ、新たな考えを生み出そうとしたり、新たなことに挑戦しようとするところについては、課題が見られました。そうした中で、今ありましたように、講師との関わり、また、子どもがジェスチャーをしたことに対する教師の褒める言葉、そうしたことをきっかけにしまして、今度は自分もやりたいという子がどんどん増えてきて、最終的に 11 人のうちの 10 人が自分からジェスチャーを披露しました。残りの１人は、講師のほうも無理矢理しなさいということはしておられません。今後がまた楽しみだというような位置づけをしておられました。そうした中で、子どもたちの笑顔や、自分もやってみようという思いはどんどん増えていって、プログラムにのめり込んでいったのかなと思います。

もう１校、三江小学校でも同じプログラムをしました。ここでは１人１人が個性的であって、自己主張する子どもが比較的多い状態でした。１人１人の子どもがパワーを持っているなという印象を受けております。また、そのパワーをどのように使ったらいいのかがわからずに、一定のルールの上で活動する力、また、１人で何かやってみようということに対しては、少し消極的に

なってしまうという傾向が見られました。でも、ここでも友達が演じる様子を見たり、講師が褒める言葉を耳にする中で、自分もちょっとできるかな、友達と一緒ならできるかなという思いで、入っていこうとする子が増えて、最後のほうは講師の話を聞こうという姿が見えてきましたので、今後もこれを継続することによって、今はない力を新たに高めていくということは可能なのではないかなという印象を受けております。

（堂垣教育次長）
　ありがとうございます。担当課からの説明は以上となりますので、ここからは自由な意見交換とさせていただきます。今のビデオ等の感想も含めて、ご意見がございましたらよろしくお願いします。

（中貝市長）
　今の資母と三江のワークショップは、年間どのくらいの時間数やりますか。

（森山こども教育課主幹兼教育研修センター所長）
　１年生につきましては、45 分間を３回行います。ただ、２年生・３年生については、最初は１時間枠、45 分間、２回目・３回目は、２時間枠、90 分というふうに、だんだん慣れていくにしたがって、時間も延びて、内容も変わっていきます。

（中貝市長）
　その間隔はどのくらいになりますか。

（森山こども教育課主幹兼教育研修センター所長）
　今年度につきましては、開始が 10 月でしたので、１回目が 10 月、２回目が 12 月、３回目は１月に行う予定にしております。

（中貝市長）
　これは平年度化したときも同じですか。

（森山こども教育課主幹兼教育研修センター所長）
　年間何時間するかにつきましては、今年度のプログラムを基にして、来年度それを増やすのか現状維持にするのか、３年後にどうするのかということは今後検討していくことになります。

（中貝市長）
　すごくいい感じがしたけれども、逆に言うと、３回やるぐらいのことで非認知能力につながるのですか。というより、どうつなげていくのかですよね。今のようなワークショップでつきましたといったら、まるで魔法みたいな感じがします。

（嶋教育長）

そんなことは絶対ありません。効果測定を委託している青山学院大学の苅宿先生がおっしゃったのは、何カ月間か空けてもよい期間があって、それ以上開けると、前回の効果性が次に波及しないのでということを言われました。ただ、いつも言っていますように、カリキュラムが肥大化していて、どのグループで何時間ならできるのかということを、今検証をしています。先生たちの負担はないですけれども、時間が取れるかどうかという問題です。これからはカリキュラムマネジメントを行い、何かを減らしてこれを持ってくる、何が減らせるのかということを同時に検討していく必要があります。それが１つです。

もう１つは、このワークショップだけではもちろん非認知能力はつきません。ここで得たさっきの講師とのやりとりとか、あるいは、子どもの特性とか、そのようなものを授業の中でどんなふうに発見するのかということを一緒にやっていかないといけません。本当に市長が言われるように、魔法のようなものではないし、万能ではありませんので、いっぱい問題はあるのですけれども、そんなことを１つ１つ解決するということです。

（中貝市長）

普段の学校の日常生活の中にどうつなげていくかというか、ただ、どう受け取るかですね。そこ自体は実験というかチャレンジですね。今度 11 月 10・11 日でしたか、文化と教育の自治体連合というのがあります。それを北海道の東川町、写真甲子園とかで有名なところ、それから、南砺市、ここは利賀村で有名なところです。それから、豊岡と小豆島町、奈義町、そこのところでやるのですが、メインのテーマは、非認知能力の向上をその参加自治体がやるかどうかという議論です。事務レベルはやりたいと言っているので、最終的にトップで判断しようと。そのデータを共有する、結果を共有して、苅宿先生のところでみんな見てもらう。そうすると、調査自体の信憑性というか、正確性がさらに高まるので、それをやろうかという話をしています。今のこの映像と、教育委員会の説明。説明を受けないと、「何か楽しそうにやっていて、イキイキとしてたね」で終わってしまうので、それをプログラムに取り込めるかどうかというのがあります。それを検討してもらいたいと思います。行けるようなら教育委員会にも出席してその場で説明してもらいたい。豊岡だけでやるよりもいろんな取組は、あと平常にどうつなげるかというときに、いろんな取組があると、さらにいいものができる可能性があるので、そこは協力をしてやりましょう。

それで、案はすごくよくできていると思いますね。教育委員会の真価ですね、これは。実証的であって、戦略的であるというのは、かなりこれまでの経験で身についてきたという感じがしますね。11 ページの基本理念、ここにすべてが書いてあるのですけれども、夢実現力（やり抜く力、自制心、協働性）もうこれは非認知能力そのものですよね。生きる力だと。という場合に、それを夢実現力と言っていいのかどうかですね。そもそも夢ってどうして自ら持つことができるのかという、そこのところは、直感的にやり抜く力とか自制心とか協働性から出てくるのかなと。やり抜く力というのは、まず夢というものが明確に意識されていて、その目標達成に対して、決して目標に対する関心を失わずに、つまり、時間的にも物理的にも遙か彼方にというか、遠いところに目的があって、途中の時間の経過の中で目標に対する関心を失ってしまうわけですね。多くの場合。だけど、決して失わずに、その目的に向かって、目標に向かって黙々と努力をし続けるという力、そういうことですよね。では一体、その目標って、どんなふうにして設定できるのか。

それから、自制心もそうですね。何か情動がワーッとエモーショナルなものが湧き上がってきて、それが方向を変えてしまうとか、平静さを失わせてしまう、そこをグッと抑える。それから、協働性は多様なものを受け入れるということもあるし、共通の夢に向かってみんなで動くときに、どのようにいろんな違いを克服していくかという力もあるけれども、そうすると、いちばんのそもそもの目標設定というのが、夢って何というか、それをぶつける力とか、作り上げる力とか、感じとる力というのは、実はこの中から出てくるのかなというのがちょっと気になるのですけどね。もちろん、こういったことがついてくると、夢とか意味だとか価値だとかというものを見つける力も基礎にあるような気がするけれども、ちょっと論理的に違うような気がするのです。それを、今ふと思ったのだけど、美的センスとか、そういうことではないかという気がするのです。これ今、『NEWTYPE』という山口周さんという人が書いた本で、この人はなぜ世界のエリートは美的センスを磨くのか、美意識を磨くのかみたいな本を書いて非常に有名な人で、最新の本で、彼はニュータイプと、それから、オールドタイプという人を分けて、オールドタイプは駆逐されていくと言うのです。昔は問題がいっぱいあったので、課題があったので、つまり、達成すべき目標はものすごくたくさんある。なので、それをどう解決するかという問題の解き方がすごく重要だと。なので、そういう人材が求められて、問題を解く力を持っている人間がいわば重宝されてきたと。だけど、今や物があふれてきていて、問題そのものが減ってきている。むしろ、問題を見つける力のほうがはるかに重要なのだと。課題を見つける力。課題って何かと言うと、ビジョンと現実との差分であると言っているのです。ビジョンというのはこうありたい、こうあってほしいという、いわば理想の姿。それと今の現状を比べたときに差がある。これが問題なのだと。なので、問題を見つける力というのは、実はビジョンを見つける力そのものでもあるというふうに彼は言っています。それは、意味を見つけるといったかな、意味を作る力みたいなことを言っていますね。

それを豊岡市の経験で、例えば僕なりに考えてみるとこういうことが言える。コウノトリは、かつては何の価値も持っていなかった。誰も関心を持っていなかった。それどころか、農家にとってはマイナスの価値だったわけです。ところが、そこに僕たちのまちは環境のシンボルだというような新しい意味を付与したのです。コウノトリは何も変わっていない。私は昔からコウノトリファンだけれども。人間にとってはかつては何の価値もない、そんなものはありふれたものだとか、あるいは、稲を踏む害鳥だというマイナスの価値を付与したのだけれども、それに対して、豊かな環境のシンボルだという意味づけをしたので、コウノトリの価値はパッと上がって、そこに向かっていこうというコウノトリ野生復帰というものが進んできた。つまり、この力ですよね。周りには昔から何も変わらないものっていっぱいあるけれども、その無価値を価値にする力というか、見つける力という、見つけた後にその目標に向かって、関心を失わずに、このことをやり抜く力だとか、協働してやっていく力だとか、そういうことがついてくるのではないかと。そうすると、何か１つ足りない気がするのです。それがまさに演劇だとか音楽だとか、そういうものをいっぱい観て、論理的ではない、夕陽を見て美しいなと涙を流すのもそういう感じのことですけどね。何か、そこはもう少し議論をしていただけませんか。

（嶋教育長）

体験とか感性とか、そういうふうなものでしょうね。全国学力・学習状況調査の質問紙で、「あなたは将来

夢がありますか」というのがありましたが、それの数値、今ありますか。

（森山こども教育課主幹兼教育研修センター所長）
ないです。

（嶋教育長）
あまり良くなかったと思います。今ちょっとアキレス腱を指摘されたのですが、そこは全国的にもよくないけれども、全国より上回っていなかったような記憶があります。確かにご指摘のように、夢を持った段階でどうするかというのは、この括弧の中で言っているのだけれども、その前の段階でということですね。

（中貝市長）
そういう意味では物事を肯定的に見るなどというのは、非常に重要な記述なのでしょうけれどもね。湯川秀樹さんが箱庭の思想から中間子理論を発想したとかね。まあ、ちょっと宿題ということで。夢を見つける力とか作り上げる力というのは、一体どういうところからくるものか。それが何か手法として、演劇を観たり、音楽を聴いたり、ダンスをしたり、何かそういうもののほうが有効ということなら、それはそれで僕たちが今までやってきていることとパーフェクトですよね。あとはどう明確に言語化するかだけ、ということになってくるので。それができると夢実現力という言葉は意味が出てくると思いますけどね。
それから、データを見ていて、1ページの「自分にはよいところがあると思う児童生徒の割合」のデータ、2019年ですよね。豊岡の小学校は全国よりいいですよね。でも、豊岡の中学校は全国のところよりも下に来ちゃっている。この差はたぶんそんなに意味のある違いじゃないだろうと思いますけれども。でも、全国や豊岡もみんな機嫌よく2018年まで右肩上がりになっているのに2019年に大幅に右肩下がりになっている。背景に何があるんですかね。右側の「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思っている児童生徒の割合」、これはまあいいですよね。

（嶋教育長）
それも何か分析が出ているかな。

（森山こども教育課主幹兼教育研修センター所長）
2018年の数値の結果が出たときに、豊岡は一気に伸びていました。伸びているから、なんでこんなに伸びたんだろうと思って、全国を見たら、全国も同じような勢いで伸びていました。なぜそこに大きな隔たりが。逆に伸びたほうの隔たりが何があったのかということについて、なかなか結論には至らなかったのですけれども、見ると、なだらかなラインに戻ってきたような。2018年が急速的に大きく変わったところかなと。

（中貝市長）
ちょっとここは気になりますよね。今の答えみたいに、2018年はむしろ、何か特別な年だったと見えないこともないですね。だとしたら、右肩上がりだなと読める。それから、7ページの不

登校生徒の中学校での新規の割合が減っている。これも絶対数は傾向としては2016年にぐっと上がっていますけど、減っているわけでもないとすると、結局、小学校のときに不登校になった子がそのまま中学校へ来ているわけですね。小学校での不登校の子どもの数は減っていない、増えているという。絶対数としてね。

（嶋教育長）
小学校が増えてきたのと、小学校から中１へは減っているけれども、中１から中２とか、中２から中３が増えていると。

（中貝市長）
１年生ということですね。

（嶋教育長）
はい。以前は中１ギャップが大きな不登校の要因だろうということで、豊岡も小中連携をして、いろいろな施策展開をしたのですけれども、それはそれで一定の効果があったけれども、今度は中１から中２、中２から中３がまた同じように増えていると。

（中貝市長）
だけど、全体としては非常にサイエンティフィックなわけだし、戦略的になってきたということですよね。子どもの貧困対策の原案を見て、いくつかのことを言ったのですけれども、その中に、特に母子家庭が、あるいは、男性のひとり親家庭も入れてもいいのかも分からないですけれども、豊岡市が主催するような音楽会、あるいは、演劇・ミュージカル・ダンス、なんでもいいですけれども、あるいは、市が共催になって、使用料を免除したりだとか、減額しているようなもの、できれば、公演をするときの条件として、必ずひとり親家庭の子どもを招待するということにしておく。一回検討するように。これは文化振興課に言ったことですけれども、その心は、とにかくこういう、いろんなものを子どものときに見せてやろうということなのですけどね。

（嶋教育長）
そうですね。どんな支え方をするかというのが大切です。

（中貝市長）
とにかく豊岡の子どもの貧困率というのは、母子家庭で圧倒的に高いのです。親の社会経済的状況に関わらず、そこから切り離して、子どもが生きる力を身につけるためには、絵でも書でも音楽でもとにかくそういうものをいっぱい観るということがいいとすると、その機会を与える。そういうようなことですけれどもね。平田オリザさんのところは来年３月の最終の土日あたりに柿落としがあって、豊岡市限定だったかどうか、小中学校の子どもたちを無料にすると確かおっしゃったようですけどね。豊岡市が補助をしたり、免除したりするときに、そういうのはもう条件をつけて、あとは本当に母子家庭の子どもたちでいいのか、ひとり親がいいのか、はたまたやはりそんなことは差別だと言って難しいのか、ちょっとそこは検討するよう言ってありますけど

ね。夢を作る力って、そういうのがいいかもしれないですね。要するに、空想ですもんね。こんなのができたら素敵と思う力があって、何かそれを論理的に突き詰めて打ち勝つというよりも、フワーッと突然頭の中に降りてくるとか、空から降ってくるみたいなのかもわからない。

（嶋教育長）
成田委員さん、アーティストなのですけれども。そのきっかけ、アーティストになる、夢を持ったきっかけをご披露していただけたら。

（成田委員）
確かに夢ということを大きく謳っているわけで、非常に大事な言葉であり、大事な概念かなと思います。市長の話を聞いていて、何と言っても具体的ではないものですが、でもそれを標榜していくというのは、とても大事なことだと私は思います。
今はその中で、夢とは例えば子どもたちを対象にしていますから、子どもたちが将来お金持ちになりたいとか、焼肉屋さんをやりたいとか、運転手さんをやりたいとか、いろんな具体的なことがあるのかもしれませんけれども、私はそういうことではなくて、市長の言葉の中にもありましたが、私なりに言ったら「価値を見出す力」、これも非常に漠然とした具体性のないことではありますけれども、市長はコウノトリのことでお話をされましたけれども、そういう美しいもの、あるいは、もっと人間の深い心に触れたような価値、こういうものを見出すような力ではないかなと私自身は思っております。そういう面で、豊岡の教育、今進めている、今日提案もありました中で、私なりに考えた「価値を見出す力」というのが、今提案があったようなところで捉えられるのではないかなと。
それから、先ほどの演劇ワークショップの中にもそれが含まれている。中学校の授業の話がありました。私もとても感動いたしました。中学校の授業を観て、昔見た中学校のイメージと、私も関わったのですけれども、ずいぶん違うなということで、あの中に、これは非常に具体的でないということでしょうけれども、何か夢があるなと、夢と言ったらいいのかわかりません。夢の芽があるなというようなものをたくさん感じましたので、この流れというのか、市教委で推進していこうとしている方向性というのは、私には理解できるつもりでおります。

（中貝市長）
今度、９、10 日でしたか、さっきの教育と文化の自治体連合のときに、平田さんが来られるので、ちょっと一回問題意識をぶつけてみます。あれだけアンテナが敏感な人ですから、ああそれはとおっしゃるかもしれませんね。また聞いてみます。

（堂垣教育次長）
佐伯委員いかがですか。

（佐伯委員）
私は高校のときに放送部でして、それで全国大会で賞をいただいたことがきっかけで、それをやり続けるのか、それとも、本当はちょっと保育士さんになりたかったのですが、両親は人にで

きないことにチャレンジしたほうがいいのではないかということを言いましたので、アナウンスの道に進みました。

夢って、最近の子に聞いても、まだ夢は考えていないという子が多いですが、この間、中学校の学校訪問があって、オープンスクールでふるさと教育の授業を見せていただきました。豊岡ではどんな特徴があるのかという授業でしたが、グループごとにワークショップで出し合っていました。豊岡でしたら、例えばかばんとかコウノトリが出てくるのかと思っていたら、バネとか、新しい分野のものがいろいろ登場してきて、それを子どもたちが自分たちなりに、豊岡にはこういうものがあるのだと理解する力ができているのだなと思いました。私たちの子どもの頃には、豊岡のことを勉強するような授業はあまりなかったですから、今の子どもたちは豊岡をいろいろと知ることができて、そうすると夢を見つける機会というか、そういうものがたくさんできて、チョイスする心の余裕ができるし。いろんなチョイスする力ができて、選ぶことができるし、学ぶこともできるし、今の子どもたちはいいなと思いました。

（中貝市長）

優れたものをいっぱい見せるということですね。

（佐伯委員）

夢但馬産業フェアを中学生が見学していて、それで豊岡や但馬にどんな企業があるのかというのが一度に見られる。ああいう見学する場があるというのは、すごくいいと思いました。また、そういう情報をいろいろとキャッチする力もついているんですね。やっぱりネットとかを使う力があるので。今の子どもたちはいろいろと情報がキャッチできていいなと思いました。

（堂垣教育次長）

飯田委員いかがですか。

（飯田委員）

先ほど市長が「夢とは何だろう」ということを言われましたが、夢って、小さい頃から自分が見たり聞いたり、やってみる中で、何かパッとひらめく面白味、興味みたいなものが１つの芽となるのではないかと思います。そして、その興味となるものが、あるいは、他者との比較の中で、他の人よりも秀でているか、自分自身の心の中で自慢となるかというようなことがだんだんと大きく膨らんできて、それが実現というかたちになって表れるかなと思いました。

それから、先ほどのワークショップなどでも、第１回を見ていて思うのですが、最初は皆何か持っているけれども、出たいのに恥ずかしさがあったり、はにかみがあったり、あるいは、そういう体験を今までやっていないから出られない。それを繰り返すことによって、自分に自信がついて、何回も何回も出たいというのが、子どもの面白いところではないかと思います。そういうことを上手に伝えていくことで、スポーツならスポーツで教えていく中で、本当に夢を実現する子というのは、いったんダーッと裾野を広げてもほんのひと握りしか頂点に立てません。例えばスキーでしたら、全日本に出る選手はひと握りになってしまう。その辺は本当にその子にとって、本当に夢に向かったのか、周りがするから僕も、多少できるからやろうかというような、そうい

う夢の中間的なものなのかというような部分があるのかなと思いました。先ほどの非認知能力といわれている部分については、夢があれば遮二無二努力しようとする力は、別のところから湧いてくるような気がします。そういう環境を地域や我々がどのように作ってやるのかなということを思いました。

例えば１つは、子どもは他者との比較の中で自分に自信を持ち、それをクリアしたらもっと上にいけるということになれば、やはり大勢のところで揉まれ、さらに大きいところで揉まれ、そして、自分の位置というものの夢が実現可能なのか、そうでないのかというのを自分なりに判断していく。さらに上にいったら、もっと上に強い人がいる。そんなことの繰り返しで実現し、チャンピオンになれるのではないか、そういうふうな観点で子どもたちを育てていけたらなと。どうしても、こういうクラブを見ていましても、やはり人間ですから、どうしても能力や体力に差があり、格差が出てくる。それは多少はやむを得ないのではないかなと思います。それを教育という部分で、確かに底上げというのはとても大事ですけれども、どこまでを底上げなのか、伸びるものをどこまで伸ばしてやるか、これらの考え方という部分も整理していかないといけないと思っています。

（向井委員）

私は今、書家として子どもたちにも教えています。私の場合は師匠との出会いがあったことが大きいです。出会いというのはとても大事だと思っています。私はその先生から、継続する力、１枚の作品、１つの作品を書くには、何百枚、何千枚と書いて、いい作品ができるということを教わりました。子どもたちは書道塾で１枚書いて、１枚いいのができたら、「先生、もうこれでOKだよね」とよく言うのですが、そうではなくて、何枚も何枚も書いて継続する力をつけてあげたいと日々思っています。なかなか今の子どもたちは、継続というか、コツコツと続けることができない子どもが多いので、少しでも身につけてほしいと思って指導しています。

私には平成元年と平成６年生まれの子がいるのですが、私が子育てしているときに比べると、今豊岡市の教育は、本当にはるかに違っています。例えば子どもたちが本物の音楽を聴く機会があったり、スポーツ選手と直に触れ合う時間を作っていただいたり、本物の演劇を観せていただいたり、そういうことに関して、本当に恵まれた環境の中で子どもたちは育っていると思います。美術１つにしても、都会と豊岡ではかなりの差があり、やはり都会の子は常に本物が見られるので優位だとこれまでは思っていましたが、豊岡でも見られる状況になってきたと感じています。

先ほど市長が母子家庭の子どもの貧困率が高いとおっしゃっていましたが、金銭的な問題もあるのかもしれませんが、お母さん自身に心の余裕がなければ、美術など、いいものを見せてあげたいと思っていてもなかなか難しいと思いますので、その辺を考えていかなければいけないと思いました。

（堂垣教育次長）

ありがとうございます。他にご意見等ございませんか。

（嶋教育長）

夢、つかむということで、もう１回考えてみます。宿題となりますけれども。

（堂垣教育次長）

宿題につきまして、また検討していきたいと思います。ありがとうございました。それでは、もう１つ議題がございます。議題の２つ目、市立小・中学校の適正規模・適正配置への取り組みにつきまして、教育総務課のほうから説明いたします。資料の№.２になります。よろしくお願いします。

（野﨑教育総務課主幹兼企画係長）

市立小中学校の適正規模・適正配置ということで、その前段としまして、今年７月 18 日から８月８日にかけまして、市内７会場で教育懇談会「豊岡の教育の現状と課題について考える」を開催させていただきました。合計 428 名の方にご参加いただき、いろいろな意見をいただきました。教育懇談会の場では、市の人口、児童生徒数の減少の状況、小規模校の状況と今後の見込みについて、説明をさせていただきました。その上で、小規模校についての教育の諸問題の解消という教育的観点から、今後、学校の適正規模・適正配置にかかる審議会を設置し、検討を行う予定としていること、また、審議会での結論には一定の期間を要することから、審議会での検討を待てない危機感を持った地域につきましては、個別に対応を行うという旨の説明と、これからの予定を説明させていただきました。その他、とよおか教育プランの取り組み等につきましても紹介をさせていただいておりましたけれども、これは割愛させていただきます。教育懇談会での意見交換、あとアンケートを取らせていただいたのですけれども、その中では次のような意見が寄せられました。

(3)のところです。意見の中で、「こんなにも人口が減っていること、特に子どもが減っていることにびっくりした」という率直な意見、その他、イのところですけれども、「小学校の統合を希望する」「ある程度の集団の中で子どもが育つ必要がある。複式学級は避けたい。」というような意見、「幼小中とも校区の再編等を検討してほしい」、生徒数・児童数が 50 人以下のところを極小規模校と呼んでおりますけれども、そういった「極小規模校のある地域に、あるいは、就学前の子どもを持つ保護者に、個別にもっと詳しい説明をしてほしい」という意見、あと、「地域で統合の話が出ているがなかなかまとまらないので、市の主導で統合の話をしてもらえないか」という統合に向けて前向きな意見がありました。逆に、カのところですけれども、「少人数を活かした教育を大切にすべきであって、安易に統合すべきではない。逆に少ない教育を活かして人を集める工夫があってもよいのではないか」といった統合については反対とする意見など、様々な立場の方から、様々な意見をいただくことができました。これらの意見の中から、次のような課題が見えてきたかと思います。

裏面の(4)課題というところです。地域によりまして、懇談会の出席者数ですとか、あるいは、意見の発言数に差がありました。関心の高い地域と、そうでない地域があるのだなと思いました。その他、極小規模校の地域の保護者については、学校統合の希望を持つ方が多くありました。また、逆に保護者の方以外につきましては、学校がなくなると、地域が廃れるというような不安感を持つ方もたくさんおられました。そういった不安感を持っておられる方でありましても、説明をさせていただく中で、だから反対ということではなくて、「やはり地域の将来を担うのは子どもたちだから、保護者の意見を尊重したい」という意見もいただいております。

次に、区長会、PTA 等で積極的に現在学校のあり方についての検討を内部で始めておられる地域もいくつかありました。その他、そういったような話し合いを PTA にしてほしいという思いがあるが、なかなかそういった希望を発言しづらい雰囲気の地域もあるということです。その他も、エのところですけれども、子どもの同級生が少ないことから、転校してしまった知り合いがいる。また、自分自身についても転校を考えているという緊迫感がある意見についても複数見られました。このことから、地域の実情によっては、早急に対応する必要があると考えております。

(5)の今後の対応というところです。もっと個別に詳しい話をしてほしいという意見が出まして、希望に応じて小学校区単位と個別に説明会の開催をすでに開始しております。教育懇談会以降、８月と 10 月に２カ所で実施しておりまして、今後も要望があれば、出向いていくこととしております。また、イのところですけれども、小中学校適正規模・適正配置審議会を今年度中に設置し、協議を開始することとして、現在手続きを進めているところです。また、先ほども出ておりましたけれども、個別に協議を開始している地域につきましては、審議会の協議を待たずに個別に対応を行うということで、随時対応させていただくこととしております。

続きまして、「２　豊岡市立小中学校適正規模・適正配置計画の策定」のところです。先ほどの今後の対応の部分でもございましたけれども、現在、豊岡市小中学校適正規模・適正配置計画を策定するために、12 月議会に審議会設置についての条例案を提出することとして、手続きを進めております。審議会の委員には、学識経験者や市民、市民の中には保護者の代表の方、自治会の代表の方と、それぞれ立場の違った方に入っていただくということですとか、あるいは、学校の状況等を教えていただくために校長等を予定しておりますけれども、そういった様々な方から、適正規模・適正配置についての意見をお伺いすることとしております。

(2)の今後のスケジュールのところです。今年度中に１回または２回、審議会を開催させていただきまして、審議いただく内容ですとか、市の現状、学校の配置状況等、委員さんにお伝えした上で、来年度からは具体的な審議に入っていけるようにしたいと考えております。来年度には委員会を５回程度開催することとしていますけれども、審議会の開催期間中につきましては、各地域で意見交換会をさせていただきまして、その意見をとりまとめた上で、審議会での検討項目として活かしていきたいと考えております。また、審議会から答申を受けました後もパブリックコメントを実施する他、地区別の説明会を開催しまして、十分な周知を行うこととさせていただきたいと思っております。学校につきましては、地域の活性化の拠点としての役割があるという思いを持っておられる方が大多数だと思います。地域の皆さんとなるべく多く意見交換等の機会を設けまして、地域の皆さんとともに、様々な視点から議論を深めて、よりよい計画を策定するように努めていきたいと考えております。

（堂垣教育次長）

説明は以上となります。ご意見等ございましたら、お願いいたします。

（中貝市長）

やらないといけないことは、やらないといけないですね。ちょっと気づいたのですが、１ページのいちばん下のカの意見、「少人数を活かした教育を大切にすべきであって、安易に統合すべきではない。逆に少ない教育を活かして人を集める工夫があってもよいのではないか」というのは、

僕から見ると、本当はこれ、違いがないかもしれない。この小規模のイメージをどのイメージでこの人は発言しているか。中竹野小学校の状況になってもなおかつ学校を守れということをおっしゃるのか。まさにそれが対話だと思うのだけれども、そういう議論をやっていくと、実は違わないということもある。実際に、島根大の作野先生も小学校の統廃合はすべきでないという基本なのだけれども、しかし、竹野だとか、あんなふうに追い込まれたところまでやめろと言っているわけではないというふうにおっしゃるのです。やりとりするからそういう議論になってくるわけで、あるいは、作野先生自身も自分の一般論をもう少し分け入ってみたときに、いろんな小規模の度合いがあるということで、議論されたのかもしれないので。その意味では、この差を埋める共通の理念の下で議論をするという、その差を埋める努力がいるような気がします。子どもたちがこんなに減っていることを見て驚いたというのは、そのギャップを埋める１つのきっかけなのだろうと思いますね。まずどこかを、とにかく早く作らないと。しかもこれがよかったと思ってもらえるようなかたちにちゃんとなるという、そういうのがやっぱり竹野ですかね。それと奈佐。

（嶋教育長）

奈佐がかなり早い。ここで言っていいかどうかわからないですが、要望書が 12 月のあたまに出てきそうな感じです。もう合意形成ができたという話です。

（中貝市長）

これも付属することですけれども、空いてくる学校をどうするんだと、施設をね。その問題が頭の痛いところですよね。地域デザインでやるのか。教育委員会からすると、いつも皆さんおっしゃるのだけど、学校でなくなると普通財産になるので教育委員会は関係ありませんと言ってね。それで、じゃあ後の議論はどうするんだという。問題は誰が受け取るんだと。こういう組織全体としての無責任体制ははっきりしないとね。誰も自分の責任だとは思わないということのないようにしないといけない。

１つのアイデアとして、日本語学校を誘致する。今、日本語学校は本当に入管法が変わって、いろんな学校が出てきていて、相当あくどいのも出てきています。日本に行かせるからなどと言って、学校へ行かせて、来るといなくなっちゃっているみたいなことがあるのです。相当しっかりしたところと組む必要があるのですが、改修すれば学校にもなるし、宿泊施設としても使える。そこでしっかりと日本語の研修を受けた人たちが、例えば城崎の旅館に入っていくとか、いろんな分野に入っていくとか、あるいは、専門職大学に入る前段のところの日本語だとか、何かいろんなことがあり得るだろうと思います。専門職大学はたぶん、日本語教育のプロフェッショナルがやってくるので、そういう人たちの力を借りるということも考えられます。安い労働力で外国人を受け入れるというのは最悪なので、そうではなくて、コミュニティの一員として、ちゃんと受け入れていくという、そういう姿勢で臨んでいかなければならない。これはもう移民はいやだと言っても舵を切っちゃったのです、確実に。入管法改正後、何年かすると家族を呼び寄せられるようになったので、移民なのです。間違いなく、その制度になっちゃっているので。その人たちが社会から隔絶されて、自分たちだけで集まると、必ず社会的軋轢が起きてくるので、コミュニティの一員として、しっかりと受け入れていくという、そういう心構えで体制を取らないとい

けない。そこは今、政策調整課等で、事前の前提の実態調査をやっているところです。そういう文脈で考えると、空いてくる校舎の利用方法として、外国人に対する日本語学校みたいなものを誘致していくというのは、悪くないなという気がします。

（堂垣教育次長）
いかがでしょうか。教育懇談会での感想でも結構ですが。

（飯田委員）
懇談会でいろいろな意見を聞かせてもらったり、学校訪問をさせてもらった中で感じることは、そこそこ生徒数がいる中での子どもというのは、揉まれながら自分を確立していき、高めていくものだと思いますので、できるだけ早く統廃合が進むことがいいのではないかと思います。確かに地域の意見も尊重しなければなりませんが、聞けば聞くほど、泥沼に入っていくような気がしました。でも、どこかで英断しなければならないので、そのことをしっかりと押さえて、説明をしていくことが大事かなと思いました。
それから、先日、市長から市の長期財政見通しの状況をお聞きし、やはり私もそれには同感しましたし、これだけ市の財政が苦しい状況ですから、地域の皆さんが自分たちの地域をこのような状況下で守っていくのだというふうに、目覚めてもらうような方向にもっていかないといけないのかなと思いました。

（中貝市長）
守りだけではしんどいので、この機会にどう進められるかというのがあると、結構頑張れるとか、辛抱できるということがありますので、その結果、この統合によって、学校がこんなに面白くなるとか、こんな挑戦ができるみたいなことが。

（嶋教育長）
そういう可能性で言えば、小中一貫校というのは魅力的で、この前も、市展を見ていて、小学校６年生から中学校１年生の作品が圧倒的に段差があるんですね。たぶん、これは専門性の、教える側の問題です。一貫校にして、小学校がしょっちゅう中学校の作品を見るとか、中学校の先生が教えにくるか、あるいは、放課後にちょっと来て、見てあげているか、そんなことが自由にできるようになったら。音楽もそうですけどね。ものすごく文化的にも、これは特徴的な教育ができるのかなと思いますし、そんなことが統合して一緒になって、そして、そういう魅力ある教育ができたからよかったという声が拾えるように、明るい展望でいかなければ、いっぱい批判を指されても、待っているから頑張ろうなという話ですよね。

（中貝市長）
そうですね。本当に子どもの発達過程を見ているみたいに、発達過程と同時に教育の過程の変遷を見ている思いですね。

（堂垣教育次長）

佐伯委員、いかがですか。

（佐伯委員）

教育懇談会を見させていただきましたけれども、保護者の方から、「学年でうちの子が１人しかいない。だけど、校区外の学校に通わせることはできないと言われた」という意見がありました。すごく辛そうで、統合とか複式学級に対して、早く検討しないといけない、それは大事だと思います。何でもかんでも統合すればいいというわけではないと思いますが、今教育を受けている子どもたちは、小学生なら６年間しかないんですよね。その子たちもちゃんとした教育を受ける権利がありますので、スピードというのはある程度大事だと感じました。これからの子たちはもちろん大事ですが、今教育を受けている子たちがいい環境の中で、揉まれるような環境の中で受けられるようなことを早くしてあげないといけないと感じました。

（堂垣教育次長）

成田委員さん、いかがでしょうか。

（成田委員）

先ほどの夢の話になりますが、子どもは１人でも夢は作っていけなくはないけれども、やはり大勢の子どもの中で、支え合ったり、認め合ったりしながら作られていくものではないかと思います。豊岡市の教育の方向から考えても、保護者も同じような思いを持っている方が多いんじゃないかなというふうに懇談会からは感じられました。大勢の中で自分の子の夢を育てていきたいという、そういう強い願いを感じました。今、佐伯委員もおっしゃいましたが、特に１人のお母さんから、そういう切実な思いをお聞きして、結局そういうことではないかなと思いました。

統合には反対だという地域の方もおられると思いますが、そのトーンは昔よりは少し下がってきたように思いますし、学校がなくなれば、我が地域が廃れてしまうのではないかという思いはありますけれども、また別の方向で考えていただくというのが私としては正しい方向ではないかなと思います。ひと言で言えば、子どもファーストということになるのかもしれません。

一方で、少子化対策であるとか、豊岡が魅力あるまちで、多くの子どもたちがここで教育を受けたい、あるいは、親がそう願うようなまちにしていくというような方向性を示すことも、また別の意味で大事だと思います。子どもがいなくなって、地域がだんだん弱ってくるというのは大きな課題だと思いますので、別の方向で考えていく必要があると思います。

少しずつ統合の気運も高まってきているような気がします。子どもはもう待ったがきかないと思いますので、できる限りの推進が望ましいのではないかと思っています。

（堂垣教育次長）

他にご意見等、いかがでしょうか。

（向井委員）

もう待ったなしの状況に置かれている子育て中のお母さんたちや子どもたちのために、スピード感を持って進めていただけたら嬉しく思います。統廃合についてもマイナス面ばかりではなく、

小中一貫校のような夢がある面があることも知ってほしいと思います。子どもたちが「あんなお兄さんにみたいになりたい」「あんなお姉さんみたいになりたい」と憧れの気持ちをもてるような環境で日々育っていくことが望ましいと思います。

（堂垣教育次長）
ご意見等、いかがでしょうか。

（中貝市長）
小学校低学年を考えると、急がないといけないでしょうね。特にスタートのところですからね。私らの立場でもいくらでも応援します。

（堂垣教育次長）
特に就学前のお母様方がかなり深刻な感じで意見を上げて来ておられるので、教育委員会としてはすぐに対応したいと思います。それと、要望が上がってくる場合、先ほど市長からもありましたように、跡地を地域の活性化に役立つように活用してほしいということが、大抵の場合書かれています。それについても準備委員会等を立ち上げて、統合のほうの準備に関わることもありますので、跡地については、豊岡市全体で公共施設マネジメント等も連携しながら、中には避難所の位置づけになっているところもありますので、市全体の中で一緒にこの統合の準備と併せて検討していきたいと考えております。

[日程４　その他]
それでは、時間もなくなってまいりましたので、その他に移らせていただきます。せっかくの機会ですので、この機会に何かご意見等、ありましたらお願いします。

（中貝市長）
僕の娘が最近２人目が産まれて、夫が２週間ぐらい休みを取った。やっぱりけんかするんです。けんかはするのですけど仲はいいです。僕の娘が洗い物をしていて、夫に「子どもを見てて」と言ったけれども、夫はこの小さい子どもをどう扱っていいかわからないものだから、２人で話し合いをしたと。その結果、夫が洗い物をして、自分が子どもを見たらうまくいったと。夫の得点は最近高いとか言って、いろいろ話し合いをしたと言っていました。そんなことがいっぱいあると思うんです。こういう問題でも、実は違っているように見えながら、本当は違っていないことっていうのは、よくあるはずなので、そこはこちら側が対話力をもって、しっかりとみていかないと。その間の技は、僕たちの側が見つけないといけないだろうと思いますね。テレビなんかちょっと違う意見を言うと、「お前はなんだ！」とバサッと切るみたいなことばっかり見ているから、対話力、コミュニケーション能力がなくなってきているので、実は違いがあまりないということ。
あるいは、ジェンダーギャップもそうだけれども、ジェンダーギャップは、まず少子化、「女性の数がいなくなると子どもの数が減りますよ」というところから入っていく。そうすると、反発がある。女性からは、「私たちは子どもを産む機械か」みたいな話になる。子どもが少ないから問題なのか。次に、社会的な損失だとか、経済的な損失だとかいって、最後に公正さの問題だとい

う言い方をしている。これは順番を逆にしちゃうと、公正さの問題だと言うと、女性たちの拍手喝采をたぶん受けるけれども、たぶん、男たちがそこで、「何言ってる」って話になって、「昔から男が外で、女は家だ」みたいな神学論争みたいになっていきますね。だけど、この「女性が帰ってこなくなって、子どもが減るのは困りますよね」というのは、みんなが納得できるかたち。その共通の土俵から入ろうということで、あの順番にあえてしてあるんです。女性たちに不人気だったとしても。そこから入っていくと、次が、ステップが小さくなってくる。「社会的な意味でも経済的にも損ですよね。もう経営で今や男だ女だと言っていられないですよね」「そうだよね」と言うと、あとで、「結局、女性にいろんなものをダメですとしてきたけど、どうなんですかね」と言ったときにハードルが小さくなる。これはこれで対話の技術なのです。だから、共通するものは何なのかを探すということを一所懸命やっていく。テレビでは一生懸命いかに違うかということを言って、バサッ、バサッと切るようなことをやっている。あれはとても良くないという気がする。豊岡は、「共通できるところは何か」というところからやる方が、したたかな感じでいいかなという気がします。

[日程５　閉会]

（堂垣教育次長）

ありがとうございました。それでは時間となりましたので、これをもちまして、令和元年度第２回の豊岡市総合教育会議を閉会します。

閉会　午前 11 時 30 分